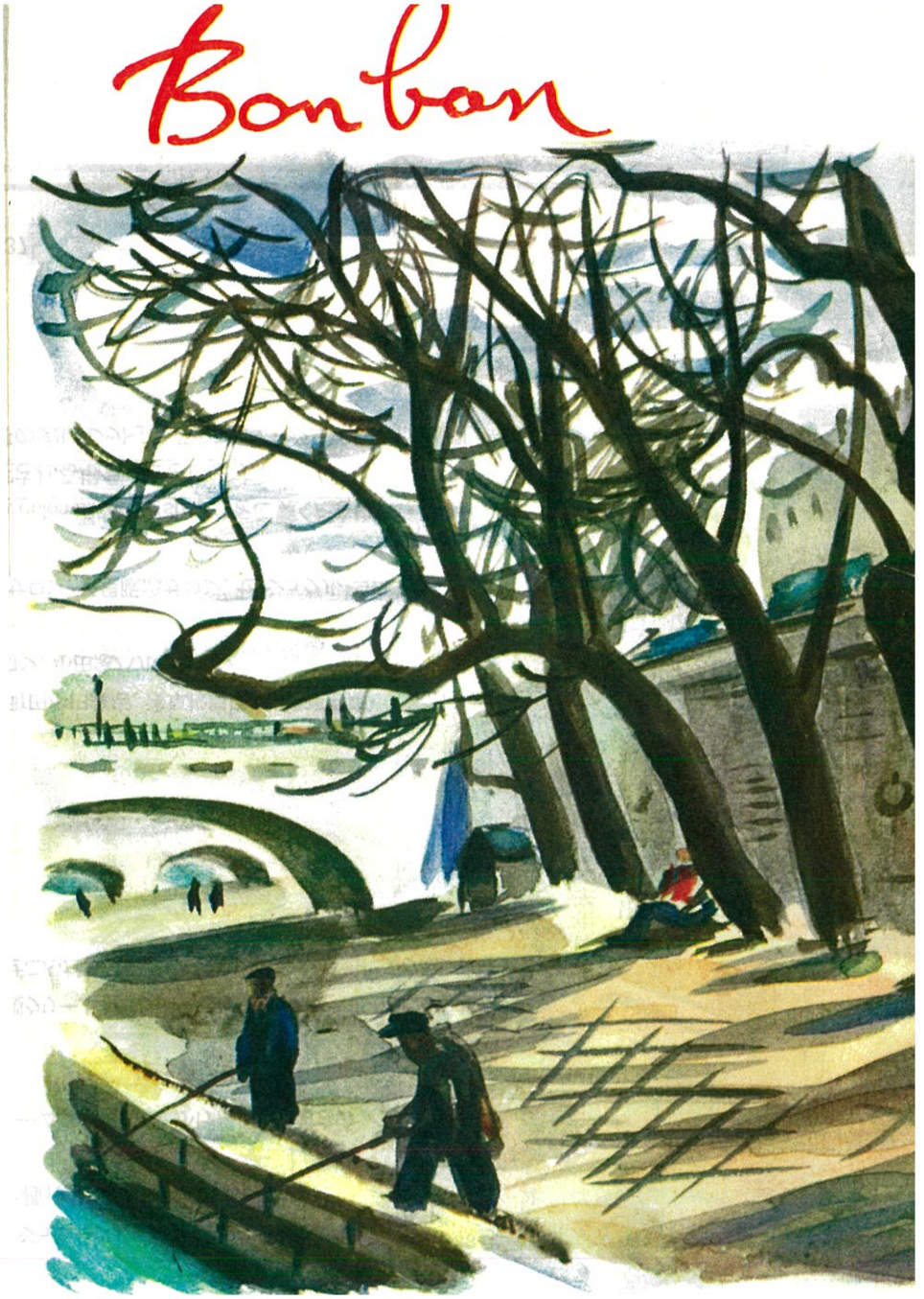

コロンバンと共に —5—

世は大平じゃ　国土安穏　豊年万作じゃ。
余は大平じゃ　スィートホームも雨もりせず、女房はお産の巣ごもりじゃ。

子供の頃聞いた話に、相当な商家の家付き娘が後家になり、後跡り息子に里のよい処から嫁を貰った。しかし可愛い息子を嫁に奪られた母親は、嫁から遠ざかる事許りに苦心をし、その結果嫁と姑の中が何うもうまく行かない。たまたまひいた風邪が姑にとって良い理由となり、〝家の嫁は肺が悪いらしい。伜にうつっては〟とばかりに、自分が産所として親から作って貰った離れに、嫁丈を母屋から移してしまった。

封建時代にふさわしい、性根の張った我慢強い嫁と、家風をのみ込んで逆らわなかった息子とは、静かに気づかれぬ様に時をかせいでいた。姑は目の前に現われぬ嫁に、そして何時でも目の前に居る息子とに安心し、嫁の来ない昔に戻った様な気分になって暮していた。所が若い利口な息子は、この母親に綺麗な肩すかしをしていたのだ。

夕暮れのある日、ふと気付くとまわりに人気のないのに姑はいぶかしみ、誰れ彼れと呼んで見たが何時もと何か様子が違う。その上何時も静かな離れが今日に限って賑やいでる感じなのに、何となく胸騒ぎし室の中で立ったり坐ったり落ちつかずいる処へ、永年息子を子供の時から見ている婆やが慌だしく入って来て、〝大奥様、可愛いお孫様が——それはそれはお器量よしで、大奥様にそっくりでいらっしゃいますよ。さあお出で下さいまし〟

不意をつかれ婆やに云われるまま、ただ何となくついて出た姑は、己が懐かしい産室から聞える可愛い産声に、駈け出して離れに上ってしまった。初孫の傍に近づきそっと顔をのぞき込むと、何んと自分に良く似た赤子だろう。〝おゝ、おゝ〟と憎い嫁などもう見えぬのか、顔中ほころばして涙ぐんだ。

〝お母様。肺病の固りです〟と嫁は云った。しかし誰も笑いもそして怒りもしなかった。その時姑の耳は急に遠くなったのだろうか？

此の若い夫婦の味方は、里の母親と婆やだった。其の後すっかり良いお祖母ちゃんになった姑と、すべてめでたしめでたしと、この話は終りになるが——。

扨て話は私に戻り、幸いにもこの話の様に姑に悩まされる事なく、典型的独立型次男坊の良人と、末娘に産まれた私は姑に甘え、姑からは可愛がられた。長女を産んだ後、第二児の胎動を覚えてから、始めて世の中に幾人かの子を産み残そうとしている自分の責任と其の育成に対する重み

を大きく強く感じ出した。
第一児の時（九州当時）体の変調も判らぬうちから具合悪く、嘔吐をもよおし毎日血を吐くので良い医者をと九大へ行った。
今でも忘れぬあの強いクレゾールの匂いに、余計私は胸が悪くなった。内科の診察室で姙娠等とは全く縁の遠い顔で自分の番を待った。診察終った私と、もう一人男の人と二人丈、特別に呼ばれた。
若い係りの先生はおもむろに口を開き、〃お気の毒ですがお二人共肺が悪いですね。炭鉱地は空気が悪いですから、転地なされた方がいいと思います。尚、念の為部長の診察を受けに来て下さい〃と、肺病に対する注意やら〃肺病は決して不治の病いではないから〃との慰めの言葉を細々と受けたが、兎に角腰が立たぬ程のショックを受け、家に帰るなり床につき、近づく死を待つ様な哀れな気分になっていた。
一日おいて部長の診察を受けに再び九大へ行く私は、良人に抱きかかえられる様な重病人だった。部長は色々と容態を詳しく私に尋ねて診察して下さった。そして微笑しながらおっしゃった。〃お目出度う御座居ます。御妊娠ですよ。これから産婦人科の方へ御案内致します〃驚きと疑問と喜びと複雑な面持で見上げると、私の見上げた目に部長の慈愛深い目が光っていた。一昨日からの精神的なショックやうらみ言も何も云わず小さく〃ハイ〃と返事をした。若い先生のあやまりも、子を産む事の大きな喜びに、別な血が湧き出る想いだった。〃肺病のかたまり、肺病のかたまり〃と心に呟やいた。
第二児の場合も同じ様に重いつわりに悩まされ乍ら、臨月を迎えていた。
前日は丁度五月五日の端午の節句。並んでいる柏餅を眺め乍ら〃沢山柏餅食べて、明日は男の子を産んで見せよう〃と、気持悪いのを堪え乍ら一生懸命食べ出した。
〃おいおい、そんなに食べたら今度は胃が悪くなるぞ。餡丈出して食べなさい〃と良人は慌てて注意した。翌五月六日、遂に待望の男の子は大きな泣き声と共に元気に産まれた。
良人は嬉しさの余り、良人の両親はもとより、御主人を始め東洋軒の皆を掴えては〃家の女房は節句の晩、柏餅を沢山食べてそのおかげで男の子を産んだよ〃と吹聴した。
男の子を持たない人達はすっかり羨しがり〃そりゃいい事を聞いた。来年の節句には家内に柏餅をうんと食べさせよう。だけど門倉君、そんな云い伝えがあるのかい？〃〃そんな事知らないよ。でも現に家じゃ男の子が産れたよ。所で君んちじゃ来年のお節句頃に産まれる予定なのかい？〃
長男の命名は御主人の伊藤耕之進さんが、我が事の様に喜ばれわざわざ自ら筆を取り〃命名　国彦〃と厚い日本紙に墨痕鮮やかに記された紙と、金一封とを届けて下さった。
それ以来その時の嬉しさを忘れず、家の社員の子供の命名を頼まれると、この時のしきたり通りして当時の嬉しさを又、家の社員に分ち、私共も若い頃を感懐深く思い出している。
結婚の折、良人の母が〃一人扶持は食べられなくとも、二人になると一人扶持で食べられるよ〃と云われたが、母の言葉通り一人づつ増えて四人家族となった我が家も、不思議と食うに困る事はなかった。

又、子供が産まれる頃母は、〃子供は自分の扶持を必ず持って来るものだ〃と云っていたが確かに母の言葉に思い当るものがあった。すべては心掛け次第だった。
結婚して以来、良人の両親と一緒に暮らしていなかった私は、姑の働きぶりを今迄余り見た事がなかったが、子供が産まれてからは孫の顔を見るのを楽しみにしている姑の為に、前よりも数繁く私の方から子供連れで、母の元を訪れる事が多くなった。
その色白で小柄なきりっとした体つきに、古い世代の典型的な日本女性を見出せる、面長な美しい人だった。
早起きの母は、丸髷に姉さん被りして、長火鉢の前にきちんと坐り灰を掃除し始める。例へ灰の中に何か落しても母の掃除のあと、なくなったものが皆出て来る。綺麗にふるわれた灰は、灰ならしで美しい目が立てられて、チンチンとお湯が爽やかな音を立て始める。
女中さんの他に婆やも居たが、一番やりにくい事、嫌な事は皆自分でやっていた。御飯を炊いたお釜についた飯粒、おひつについた飯粒、子供の食べ残し等は皆綺麗に洗って、何時も此の長火鉢の銅この上にお皿をのせて干している。
この干し飯は三月三日の雛祭りに、あられに姿を変えて小さな子達を楽しませる為に丹精している。母亡き後は、食べる事が出来ない味のよさに、雛祭りが近づく度になつかしく思い出している。
此の長火鉢のすぐ近くの棚に沢山のお茶の罐が並んでいる。女中さん達が台所で落す野菜のはしを集めて、夜なべにこれ等を、薄く切ってお砂糖かけの野菜菓子に仕直す。そして母は此のお茶の罐に〃はす〃〃にんじん〃等々と一寸見えたお客様のお茶うけ、熱いお茶と共に差し出すのだった。物を粗末にしないという事は、母の一生を通じての信念だった様に思う。御裁縫の抜き糸、余り糸、赤・青・白と色とりどりに可愛い玉を幾つも幾つも作り、遊びに来る子等に惜しげもなく与える。今でもそのまま真似しているのは、母が種から鉢植えした、桃とカリンだった。母が後年胃がんで亡くなる前熱海の別荘へ保養に行った時、この種から育てた二つの鉢を寝乍ら見度いと云う母の願いに、庭に植え直して皆の眼を楽しませて呉れた。亡くなった後、子供達はこの二つの木を祖母に見立て、餅草を摘み母の好きだった草餅を作って小さなコップにお茶を入れて木の根元に供えているのをよく見掛けた。水が減ると〃ママお祖母ちゃんお水飲んだ〃と云う。母の孫達そして私の孫達に迄、食べたあとの種を植え実をならせる事を教えたのも母の丹精の賜ものであろう。
何にも出来なかった私は、ただ傍でじっと見ていた丈だったが、母の生活の中からにじみ出る多くの教えのすべてを得られない迄も、その内のいくつかが、何時の間にか自分の身についているのを、何かの拍子に〃ああ今やってる事は母がやっていた事だ〃と独り感じる事がある。
私達夫婦は、結婚初期の五年間を、真に嫁として妻としての普通一般家庭の生活に、平和を見出し幸福を感じていたのだ。
——この項終り——　（門倉　くら）